

海外林業研究会々員の広場

嫌われても国際協力（6） 赤ペン入れてこそ

この5月、国際ワークショップ発表論文集を発行しました。国際ワークショップを主催したのは、2003年2月のことですので、ワークショップ開催から出版までに1年以上かかったこととなります。これだけの時間がかかったのは、編集委員と著者との間で内容に関するやりとりが繰り返されたことによります。ワークショップ発表論文集というと、発表者が提出した原稿の体裁を整えて印刷するだけのものもありますが、今回の論文集では、ワークショップ前に提出された原稿を編集委員が事前にチェックして、ワークショップ時に各論文の著者に、詳しい修正要求を行いました。ワークショップ後も、編集委員と著者達のやりとりが続けられました。

発表者と直接話ができるのは、ワークショップの開催時に限られていて、その後は電子メールでのやりとりとなります。データと原稿を目の前においての議論ならば、すぐにすむところを電子メールのやりとりでは、コメントが正しく伝わらないことや、それぞれに目の前に抱えている仕事を優先するために、作業は予定よりも遅れてしまいました。集めたものの体裁を整えて印刷するだけなら、ほとんど苦労はありません。そして、さまざまな理由で、そのような体裁は整っているものの、使い物にならない印刷物が出回っているのも事実です。最初の原稿を作るまでに費やした労力を無駄にしないためにも、内容を高めて他の人に利用できるようにすることが必要なのは言うまでもありません。

送られてきた原稿に厳しいコメントをつけたり、場合によっては原稿の掲載をあきらめてもらったりすることは、簡単なことではありません。時として、うらみを買うこともあります。しかし中途半端な原稿の体裁を整えて、もっともらしい出版物とすることは、研究業績数という点から短期的には感謝されますが、長い目で見ると能力向上の機会を奪っていることになるのです。ワークショップ発表論文だけでなく、技術協力の報告書等の作成においては、相手のプライドを傷つけることを恐れず、原稿を真っ赤にして内容を高めていく作業こそ、国際協力と感じています。（藤間 剛）

（本稿の成果物は、本誌 89 ページの図書紹介欄で紹介されています。）